

令和3年9月25日

アーツ前橋あり方検討委員会事務局 様

委員 大橋慶人

## アーツ前橋への意見書

### ① 今後のアーツ前橋に向けた意見

第3回検討委員会に向けて提言したとおり、アーツ前橋は開館を迎えるにあたり、平成21年「美術館基本構想検討委員会」の基本構想、翌年の基本計画、平成24年「前橋市芸術文化施設運営検討委員会」による芸術文化施設の在り方に関する提言など、美術関係者だけではなく多くの市民がかかわり、丁寧に基本的な姿勢を作り上げてきた経緯がある。アーツ前橋の3つのコンセプト「創造的であること creative」「みんなで共有すること share」「対話的であること dialogues」は地域の美術館にとって大切な要素が盛り込まれ、誇れるものであると感じている。

また、開館直前の美術館構想プレイベントでは、「アートでつながる市民の想像力」を使命にして、「つながる美術館」「成長する美術館」「文化を創る美術館」であることを掲げている。

アーツ前橋は、まちなかにある美術館として、これまで「駅家の木馬」や「表現の森」「フードスケープ・風の食堂」などは地域住民と一緒に創り上げてきた。開館5周年の「つまずく石の縁」は、滞在制作等を通じて商店街メンバーと仲良くなった国内外のアーティスト達の展示やパフォーマンスを商店街各所で展開し、アーツ前橋と中心商店街の共同事業としてユニークな展覧会を試みた。

これまでのアーツ前橋の実績は、前住友館長を中心にして、若い学芸員達が手探りで情熱を傾けて創り上げてきたものである。これまでの企画展は上記のコンセプトに基づいて実施されたもので、国内外の高い評価を受けていると思う。前回述べた通り、開館10年に満たないこの時点で、アーツ前橋のコンセプトや基本姿勢を変える必要はない。今後の企画もこのコンセプトに基づいて計画されるべきであると思う。

アーツ前橋の一つの柱であった『アートインレジデンス』も「アートと人がつながる」「人と人がつながる」「前橋と他の地域、世界がつながる」上で、価値のある事業であった。コロナが収束した折にはぜひ再開して欲しい。商店街では、アーツ前橋ができるまで私を含め多くの人がアートとは無縁であったが、滞在制作する拠点が商店街内にあることから、多くの人たちが日常でアーティストと関わりを持ち、現代アートがより身近な存在となった。我が家でも初期のころから滞在する国内外のアーティストや学芸員達と拙宅でホームパーティーを開くことを慣例としており、多くのアーティストと個人的なつながりがある中で、彼らが前橋に滞在したことを大切にしており、その後世界で活躍していることを誇りに思う。

トリエンナーレである「前橋の美術」も過去2回アーツ前橋を主会場に開催され、昨年の「前橋の美術 2020-トナリのビジュツ-」は商店街や地域のアートスペースともつながり、多くの共感と来場者を得た。この「前橋の美術」の創り方を範とし、上記のコンセプトに沿った形で、市民アーティストが主体的に企画する市民美術展なども計画し、関係するサポーターを増やし、来館者数を上昇させていくことも必要であると思う。

地元の商店街の中には、「ヤーギンズ」「マエバシワークス」「map 前橋”市民”ギャラリー」などの

アートスペースが点在し、アーツ前橋とつながることで、存在感を高めてきた。アーツ前橋と、ジャンルを超えた多くのアーティストが結びついており、今後も地域のアーティストを大切に、彼らと連携してアーツ前橋の表現力を向上させていくべきと考える。近隣の「白井屋ホテル」内には価値のあるアート作品が多数展示されているので、今後はアーツ前橋とのつながりを意識していくと新しい展開が期待できると思う。

## ② 館長選任に向けた意見

アーツ前橋館長の選任は、学芸員、事務・管理職を含めたアーツ前橋内部で議論し、最終的には前橋市が選任するべきと考える。我々検討委員会委員は、再発防止に向けた提言と今後の在り方について議論することを受け持っており、具体的な館長選任に関する権限は有していない。我々は、館長を内定する市民の付託を受けていない。

ただ、館長の条件として、次の項目を満たす方が望ましいと考える。

- 1) 美術館の運営に経験がある専門職であること
- 2) 現代アートや表現に造詣が深いこと
- 3) これまでのアーツ前橋のコンセプトや実績に理解があり、基本的な姿勢を受け継いで頂けること
- 4) 今回の作品紛失事件の再発防止に真摯に取り組み、信頼回復に向け、努力して頂けること
- 5) 在職の学芸員や事務・管理職と徹底的に話し合い、信頼関係を築き、学芸員の能力を引き出して頂けること
- 6) アーツ前橋を取り巻く地域社会、在野のアーティスト達と協調していけること
- 7) アーツ前橋再興のために、覚悟をもって就任頂けること

以上、思いつくままに館長としての条件を列挙したが、厳し過ぎるかもしれない。でき得ればこのような条件に当てはまるくらいに考えた方が良い。表現は悪いが、「火中の栗を拾って」頂ける人物を探していかなければならず、選任する側も覚悟と献身が必要である。

#### 第4回アート前橋あり方検討委員会 事前意見【金井委員】

##### 1) 今後のアート前橋に向けた意見

■美術館は最高のサービス施設で有るべきだと思います。館長から学芸員、事務職員まで全員が奉仕の心で訪れる人と接し、馴染みとなりたい。

人々に芸術の素晴らしさと重要性を解りやすく、楽しく、丁寧に紹介していくスペースであり集団でありたい。

■3つの活動のコンセプト（創造的であること・みんなで共有すること・対話的であること）を基本理念にしているなら、もう一度振り返って考えたい。

・創造的であること：市民が創造的な心を育み、生活の一部と出来ただろうか？ 上から目線の押しつけになってなかったらろうか？

・みんなで共有すること：市民が気楽に寄ってくるような雰囲気作りが出来ただろうか？ 一部の同じ顔ぶれだけが集まっていなかったらろうか？

・対話的であること：どんな対話があったのたらろうか？ 人々のいろいろな意見や要望や疑問に、門を閉ざさないで対応できたたらろうか？

##### 2) 館長選任に向けた意見

■「市が責任を持って選任したいと考えております」とは、どう言う意味でしょうか？

・一部の委員や市議会の意見から、決定されたのでしょうか？

・市長が任命するとすれば、具体的にどなたが選任するのでしょうか？

■館長の選出は、「あり方検討委員会」の最も大切なテーマであると思います。

このテーマは会議の中で柵を作らず、大いに議論し、優れた人材を検討すべきと思います。



## 第4回アーツ前橋あり方検討委員会 事前意見【小山委員】

### 1) 今後のアーツ前橋に向けた意見

前回の意見でも言ったのですが、もう少し、明確に言えたらと思います。

アーツ前橋は前任の住友館長のもと、多くの学芸員と職員の方が、今までにない視点でアートに対して展覧会を実現してきました。そのコンセプトは先取りし過ぎていたと思いますが、今後もさらに重要になるポイントだと思います。

そして、もちろん、今回のようなことが2度と起きないような管理体制も大切だと思いますが、若い力で、実験的な、地域の人ともつながるような場であることが継続できたら素晴らしいと思います。様々な問題も起きると思うのですが、そこは乗り越えていき、日本の他の地域には決してない美術館のあり方を探っていくことが大事だと思います。若い40代とかの館長のもと、学芸と市の職員、全体のチームで展覧会をはじめとするいままでの実験的な活動を（ちょっと分量は少なくしていいと思いますが）継続していつてもらえたらと思います。

### 2) 館長選任に向けた意見

館長に関しては、この委員会などで決めるのではなく、もちろん、前橋市が決めるべきです。

しかし、今回の委員会のような時ですら、現場のアーツ前橋の学芸員の意見を聞く機会をまったく設けることのない、市の姿勢には不透明なものを感じざるをえません。いまでも、彼ら彼女らの意見を聞くべきだと思っています。

そう思うので、わたしは、公募性をして欲しいと思います。この渦中にどれだけの応募があるかわかりませんが、公募をして、それを前橋の市の方や美術館の関係者（アーツカウンスル？）の方と面接をして、そのあと、学芸員、職員の方とも面接をして、ちょっと時間をかけて決めていくのがいいと思います。

3年なのか、5年なのかわかりませんが、一定の期間を継続させ、その結果をみて、市が適切かどうかを判断して継続させるかを決められるようにするのはどうでしょうか？

今回の委員の方にも経営のプロの方もいるので、そのご意見を伺ってやってみるのもいいのではないのでしょうか？

市が密室の中で決めていくことは避けたほうがいいと思っています。もちろん、人事でするので全てはオープンにする必要は全くないですが、このような状況なのでなにか、公平性があつた方がいいかと。

以上です。



## アーツ前橋あり方検討委員会（第4回）に向けて

島 敦彦

●館長候補の選定方法 館長の選定は、美術館によって全く異なるが、いずれにしても前橋市が主体的に考えることが重要である。

●館長候補の要件 あり方検討委員会で、期待する館長像について意見交換することは重要である。私なりに思いつくままに記してみた。

- ① 国内外の現代美術の現状と今後について見識を持っている方。
- ② 演劇や音楽、映画や文学、デザインや建築、食や環境など他分野にも関心のある方。
- ③ アーツ前橋の活動方針に沿って、事業計画を適切に立案し、進捗管理できること。
- ④ 国内外から注目される企画展の開催とコレクションの形成が展開できること。
- ⑤ 作家、美術関係者、前橋市民、来館者、メディア等と分け隔てなく対話できること。
- ⑥ 美術館運営におけるリスク評価と管理、コンプライアンスの徹底ができること。
- ⑦ 職員に対し思いやりと配慮を持って接し、風通しの良い職場環境を醸成できること。
- ⑧ 前橋市あるいは関東圏に在住し、原則として常勤で活動できる方が望ましい。
- ⑨ 40歳代半ばから60歳代前半で、健康かつ快活に活動できる方。

●業務量の見直し 今回の提言が実りあるものだとしても、学芸員の待遇改善や人員増、あるいは予算の復活が見込めないようであれば、業務を見直さざるを得ない。これまでの業務のうち、いったんは休止しても問題ないものを取りやめる。あるいは内容はそのまま回数減らす。さらに企画展の会期をできるだけ延ばし、年間の企画展の回数を減らす。あるいは年度またぎ（5月の連休頃まで延ばすことはよくあり、年度末年度始めの忙しい時期に展示替えをしないで済むメリットがある）の企画展を入れることで、予算を2か年に分割する。あるいは、新収蔵品を活用した企画性の高いコレクション展を行う。

●街の回遊性 アーツ前橋の立地している場所を中心に、周囲に点在するさまざまな施設やショップ、レストラン等との連携は、開館前後から模索されてきたことと思う。特にNPO法人マエバシ・アート・プラクティス（map）やya-gins（ヤーギンズ）、ユニークな現代美術作品を随所に展示している白井屋ホテルは、現代美術に関心のある方にはアーツ前橋に来たついでに是非立ち寄っていただきたいスポットだ。さらに岡本太郎の《太陽の鐘》や萩原朔太郎記念前橋文学館も徒歩圏内に位置し、街の回遊性を高める要素が前橋市には随所に溢れている。こうした街の魅力をこれまで以上に発信し、活用してほしいと思う。

●学芸員の資質向上 学芸員は、ただ毎日美術館に出勤すればいいわけではない。回遊魚の

ように絶えず現代美術の動向を観察し、人と会い、語らって（今はやりにくい）、将来の企画展やイベントの仕込みに備えなければならない。そのため、少なくとも都内や近隣県で開催される企画展を見るための出張費がそれなりに支給されるようにしてほしい。また若い学芸員には研修の機会を与えてほしい。群馬県立近代美術館や埼玉県立近代美術館など近隣の公立館でもいいし、東京国立近代美術館など国立館での研修に応募してもいい。自前で用意できれば一番よいが、さまざまな助成金も活用して、海外研修を行うことも必要である。研修は、展覧会やコレクションに関するだけでなく、IPM（総合的有害生物管理）や保存修復関連の講習会もあるので、そうした機会も逃さないでほしい。保存修復に関する専門家を、アーツ前橋に招聘して講演会をしてもらうのもいいかもしれない。

●予算の確保 ここまで記述してきた問題提起は、予算がなければ実現しないことばかりである。と同時に、学芸員や事務系の方々の待遇改善や増員がなければ、業務過多になる。前橋市として、早急に次年度予算を組んでいただきたい。アーツ前橋の設立の趣旨を振り返り、市民とともに「つながり」「成長し」「新たな文化を作る」拠点として、皆で力を合わせて、再出発できるよう応援したいと思う。今やるべきこと、これからやるべきことを学芸と事務方が主体的に考え、次年度以降の企画展の開催や収集活動等を再開すべきである。

予算の根幹部分に関して言えば、維持管理費や人件費の固定経費がある一方、展覧会活動（企画展が最も予算がかかるが、これは美術館の生命線である。コレクション展も重要で展示設営にそれなりの経費がかかる）と収集活動（これも調査研究のための打ち合わせの旅費や資料購入費が必要になる）、さらに多くの人々とつながるための交流事業に多額の経費がかかる。企画展とコレクションは、美術館という車の両輪で、どちらが欠けても機能しなくなってしまうのである。今年度は収集予算もなく、展覧会活動も十分にできない状態に追い込まれたが、次年度以降は、前々年度以上の予算を計上していただきたい。

●開館 10 周年に向けて 2023 年度は開館 10 年となるので、2022 年度から周年事業の準備経費を別枠で盛り込み、当該年度は充実した企画展とコレクション展、その他アーツ前橋のこれまでを振り返り、これからの展望する国際的なシンポジウム等の開催をするべく、特別に増額を検討していただきたい。



「アーツ前橋不要論」はくすぶっている

専門家の評価は高いようだが、一般市民の評価は低い

要は「分からない」「おもしろくない」特に現代アート関連の企画展  
館の目的の一つである「多様で質の高い」ことのうち「多様性」は担保されているか？

「令和元年度・市民アンケート」（直接的にアーツ前橋のことではないが、取り巻く環境としての状況）

「まちの住みやすさ」で重要視している項目（3項目を選ぶ）のうち「芸術文化に触れられる」は3.6%で、21項目中16番目。上位3つは「災害に強い」「医療環境が充実している」「まちの治安がよい」。

月に2～3回以上まちなかに来る人（全体の約27.6%）の目的（複数回答可）として「芸術」は2%で12項目中12番目。全体では0.55%=1822人（市33万人として）。

「数ではない」とよく言われるが、「数」も大切

「数ではない」・・・では「何か」

そして、評価をどう表現するか？ 施設によっては評価基準を導入している

「数」の視点から（資料「直近5年間の来館者の推移」から概算。H30年度を除く）

展覧会費用	5000万円/年、3回/年	→	1700万円/回
展覧会来場者数	2～3万人/年、3回/年	→	9000人弱/回

嫌であっても費用対効果は問われる この数字は評価できるのか？

「数」では評価できない面もあるが、「数」で評価すべき面もある

- 1 アーツ前橋を市民のどの層にどう届けるか 「目標」は必要（既にある？）  
「多少の関心がある層」にどう働きかけるか マーケティングも実施？
- 2 評価も必要
  - ①現在の協議会とは別に「(仮称)評価委員会」の設置（協議会で評価実施？）
  - ②「評価基準」の作成 作成は容易ではないが（既にある？）

館長像 ・現在の「館長1人は美術専門家、副館長1人は市職員」の変更→予算が許せば副館長2人制に 館を総合的な視点から見る人1人+行政から1人  
あるいは、館長に総合的な視点の人を充て、副館長に美術専門家でも可  
・「美術専門家」は現代アートでない方も一考か



#### 第4回あり方検討委員会に向けた事前意見【渡辺委員】

##### 1) 今後のアーツ前橋に向けた意見

アーツ前橋は現状、館の方々はとても良く、また沢山の業務をこなしておられると思っております。

従いまして、専門外でもありますので、展示・運営等についての意見はありません。

そこで、参考的な意見としてひとつだけ記します。

1986年に東京六本木にサントリーホールが開館した際、当時館長でありサントリー社長であった佐治恵三は次のように挨拶しました。(今回の意見に相当する部分のみ)

「サントリーホールは1891年開館のカーネギーホールに95年遅れて開館しました。今は95年と0年という経験の差がありますが、100年後にはその差は約”半分”、200年後には”1/3”となります。文化は様々な人々が愛し、携わり、生み出すことを続けていく中からさらに生まれ、豊かになり、広がっていくものと信じます。

サントリーホールは、これから末永く多くの音楽家、ご来場の方々に愛されながら、日本のクラシック音楽の普及と発展に幾ばくかでもお役に立てるよう、日々努力を積み重ねて参る所存です」

つまり、“続けていくこと”イコール”愛されるアーツ前橋”になることと思います。

##### 2) 館長選任に向けた意見

一言で言えば「アーツ前橋を”自分の会社”として経営できる人」です。

アーツは会社ではありませんので、売上・仕入れ・経費・利益といった数字と責任を追うというような意味ではありません。

しかし、総勢10名前後の中小企業であると考えれば、その社長はどうあるべきかはハッキリしてきます。日本の会社の99%は中小企業で、沢山の素晴らしい社長がいます。

その人たちに共通している姿勢は以下のようなものです。

- ・従業員を家族のように大切にしている
- ・従業員には時に厳しく、時に温かく、人として接している
- ・お客様を大切にする姿勢を片時も忘れない
- ・取引先を大切にする姿勢を片時も忘れない
- ・お金、モノ、情報の管理には人一倍気をつけている
- ・チャンスがあれば率先してチャレンジする
- ・チャレンジに際してのリスクは自らが追う覚悟で臨んでいる
- ・事にあたって「張り切る、見切る、やり切る」ことができる
- ・自分の技術や経験をすべて会社に捧げている
- ・明るい

以上です。よろしく願いいたします。



第4回アーツ前橋あり方検討委員会 事前意見 【小坂委員】

(1) のみで、以下のとおりです。

前橋市の中心部にぶらっと出かける人は少ないので、アーツ前橋については、前橋市民の認知度は低いと思われる。

今回の事件で、新聞報道があり、そこで初めて知った人もいるのではないか。

群馬県立美術館など、他の施設と協力しながら、「群馬トリエンナーレ（ビエンナーレ）」みたいなものを開催し、あるいは、白井屋ホテルなどとのタイアップするなどして、まずは、施設がどこにあるのか、周知が必要なのではないか。

「地域アートプロジェクト」や「教育普及関連事業」は、評価的に高いので、引き続き、取組んで欲しい。



第4回アート前橋あり方検討委員会 意見【田中委員】

アート前橋は、市民、商店街など周辺の人たち、作品の所有者、作家、他の美術館などのおかげで活動できているという意識を持つ。

以前からこういった意識は持っていたと思うが、改めて強く意識すべき。

#### 第4回アーツ前橋あり方検討委員会 事前意見 【青野】

##### 1) 今後のアーツ前橋に向けて

当初掲げた3つのコンセプト「創造的であること」「みんなで共有すること」「対話的であること」に立ち返り、ここでリセットしてまたはじめの一步から積み重ねて行くことが望まれているだろう。信頼の回復は実績あるのみ。

作品管理や学芸員の質の向上は研修機会の活用や他館への聞き取りなど、外部協力も期待できる。

報連相は基本。

##### 2) 館長選任に向けた意見

「あり方委員会」は館長選任の場ではないと考える。

理想像としては、以下があげられる。

1. 美術館の現場で運営にかかわる実務経験者であること
2. 美術の専門家であること。あるいは館長は事務職で学芸は特命館長?
3. 過去のアーツ前橋の実績を踏まえた上での活動継承ができる人
4. 信頼回復に努力できる人
5. 3つのコンセプトを実践できる人



## 「市民が館長」－8年めのアーツ前橋に向けて

20210928

アーツ前橋の今後のあり方と、館長像について、というのを考えた際、もしかして、今、機会を作らなければいけないことのひとつに、再度の「市民会議」の開催があるのではないかと思いました。

今回のあり方検討委員会における、紛失事故を踏まえての、具体的な改善点については、私自身も多くを学ばせていただきましたが、これまでのアーツ前橋のもっとも大きな成果は

前橋という地域と世界をつないだ点にあります。

地域をみつめることが、世界につながる可能性があることを、7年間のアーツ前橋は、抽象論ではなく、具体的に、私たちに指し示してくれました。

全国1060の美術館がある中で、アーツ前橋の果たせる役割はなんなのかといえば、地域色であったり、基本計画の言葉を借りるなら「前橋文化」それは前橋の人々との接点の中から出てくる、抽象論や一般論ではなく、今、前橋に生きている人々との対話の中から生まれてくるものだと思います。

現市長の当選を受けて、美術館を作るのか作らないのか選択を迫られた時、あの時の前橋市民が、「いや前橋には美術館が必要なんだ」と提言して、アーツ前橋は生まれました。

そのアーツ前橋が、大きな危機に瀕したのなら、再び広く、直接市民に開き、市民と語り合い、市民に問う。市民自身も、反省をし、よりよい未来を今一度模索する。

今回の事故に関しては、個人、美術館、前橋市、それぞれの責任が問われていますが、実は、美術館を欲した前橋市民にも責任がある。ただそれは、前橋市民にも、その挽回のチャンスがあることを意味します。

7年前の市民の提言は、細部を見たつもりであっても総論に過ぎなかつたり、具体的に構想したつもりが、実は抽象度が高かつたり、今回の出来事を含めて、この7年間で、詰め切れていなかった部分が見えてきたところもあります。そこを「市民会議」で再度詰めていく。

その間、誰が館長なのかといえば、「市民が館長」です。

あの時、前橋市民は、誰かが用意してくれる美術館を欲したのではなく、「私たちの美術館」を手に入れたかったはずです。

しかしいつの間にか、美術館も、市民も、お互いに距離を取り合うようになってしまった・・・ならば今一度、前橋市民と美術館との「あり方」をたしかめる必要がある。

ひいては、ほんとうに私たちは美術館を必要としているのか、という問いかけもせざるを得なくなるかもしれません。

アーツ前橋のことは、私たち前橋市民にも責任がある。そうならば、その問いかけに向き合う必要もあるでしょう。

その動きは私たちや、前橋という地域を考え直すことになり、結果、世界を考えることにもなる・・・7年間のアーツ前橋が、私たちに指し示したことです。

今。すぐに、具体的な個人名を求めたり、望ましい館長像を語り尽くすのは、少し拙速のように感じます。

当面、必要な館長は引き続き、行政職にお願いし、1年ないしは2年、開館前に行ったプレイベントのような動きを含め、「市民会議」で今後のアーツ前橋を考える。

「市民が館長」という作品づくりでもあります。

前橋にとってアートはどのようにあるべきなのか、アーツ前橋の方向性を探る中で、望ましい館長？専門職？像が見えてきたり、具体的に担ってくれる個人と出会える可能性があるのではないのでしょうか。

7年前は、私もそんな動きの中にいましたが、もし実現するなら、今回はもっと若い方々、新しい方々に担っていただければと希望します。

中村ひろみ

小池委員.txt

下記にて意見をお送りさせていただきます。  
お手数をおかけしますが、会議へのお伝えをお願いいたします。  
今回は出席できず申し訳ございません。

1) 今後のアーツ前橋に向けた意見

→前橋に限った話ではないですが、公立の美術館運営では、「美術の専門家」と「行政&市民」の間には意識の差が多分にあるものと思います。美術の専門家については自分のキャリアを中心に考える、市から出向の職員は地域を中心に考える、という意識があるのは事実だと思います。どちらも否定するものではありませんが、歩み寄りの距離が地元のための美術館には必要だと思うので、地元のことを考えた動き方や展覧会、イベントなどの企画について、年間計画を市と専門家が協議の上で事前に合意し決めていくと良いかと思います。また、その内容について、市民が関わる展覧会やイベントの割合について最低ラインを設けるなど数字で管理するのも方法の一つだと思います。また、今回のことを忘れないために、今後職員となる方々に向けた研修などを毎年用意するなどのリマインドのプログラムの設定をできると良いと考えます。意識の問題が引き起こす事象をこれ以上起こさせないための提案です。

2) 館長選任に向けた意見

→市が主体的に選任、について異議ございません。美術界での経験があり、かつ、行政や企業との美術館運営をした経験のある方が望ましいと思います。

どうぞよろしく申し上げます。

小池藍